

# 日本における性教育

相模原協同病院  
産婦人科部長  
佐藤 芳昭

## はじめに

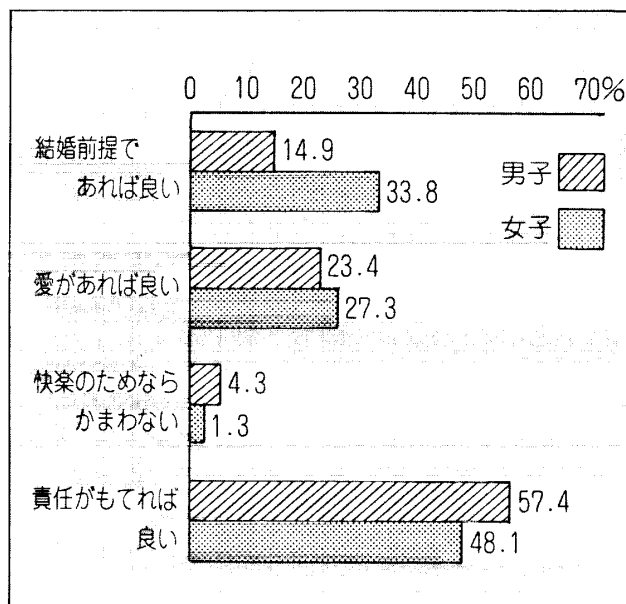
十代妊娠の激増とともに、性教育の必要性が声高く叫ばれるようになって久しいが、わが国においては、実際に学校教育の中で性の教育を単独単位として行っている学校はまだ少ない。しかもその指導や内容もまちまちで対応にも一貫性を欠いている。いつ、どこで、だれが、どのように、何をふれるかについても合意があるとは考えられないのが現状である。本稿では産婦人科医が性教育の現場にどのようにアプローチをするのが最良かを考えてみたい。また日本ではとくに思春期における現象面は、米国におけるその数年後をたどっているとも言われ、米国における現状は日本の性教育の方法に対しても、多くの有意義な示唆に富むと思われるので、筆者の経験した米国での性教育の現状と対比してのべてみたい。

## 日米における十代の性の現況

優生保護統計からみると、20歳未満の人工妊娠中絶数は（全体的な率からみても、絶対数も）増加しており、一方で全年代の中絶数は減少しているので、性教育に関心のある人々の間では危惧の声も上がっているが、一般的にはそれほど問題視はされていない。分娩数も同様の傾向があるので早目に手をうたないとこの傾向は拡大してゆくであろう。

このように十代の妊娠例の増加の背景には社会における性への考え方の変化に対して、子供達が性に対する主体的な判断力を欠き、意志決定や行動の開始に対して、適切な決定がなされていないことがうかがわれる。

私たちが調査した新潟市内での高校生・大学生の性交にいたる理由をみると図1のごとく、愛があれば、責任がとればそこに性交が存在しても当然と考える者が多く、これは男女ともに差がみられない。このように安易に性交しかつ妊娠してしまった症例はそれ



(図1) 性交を肯定する理由

以後どのような経過をたどるのであろうか。

日本産科婦人科学会小児・思春期問題委員会の最近の報告<sup>1)</sup>によれば妊娠1,988例中54%が中絶に終わっており、社会人が含まれる19歳を除いても、その率は変わらず、その中の80%が未婚での妊娠である。性交にいたる動機としては30%がなんとはいしに、またはわ

(表1) 妊娠の結果

結果/年齢	12	13	14	15	16	17	18	19	計	%
自然流産	0	0	1	0	2	3	13	22	41	2.1
人工妊娠中絶	1	3	2	24	116	177	314	439	1,076	54.1
経陰分娩	0	0	1	2	22	70	126	214	435	21.9
帝王切開	0	0	0	1	0	7	2	14	24	1.2
不明	0	0	1	2	12	18	43	64	140	7.0
回答なし	0	0	0	8	21	45	80	118	272	13.7
計	1	3	5	37	173	320	578	871	1,988	100.0

からないと答えるなど、動機づけはかなり困難である(表1)。

しかも性交に対する積極性は女子生徒の方が年々高くなり、いわゆる男子の行動レベルを越えてしまう“乗り越え現象”が性の面でも現われつつあり、妊娠という現実を実際に背負う女子への対応はますます困難な面が多くなりつつある<sup>4)</sup>。では何故に多くの若人が安易に性交し、妊娠し、中絶を行ない、中絶後は60%以上が胎児への気持ちは“かわいそう”と考え、一方では短い期間で妊娠した相手と別れてゆくのであろう。この中では社会の風潮である生命の軽視、いたわりの心の希薄化などと軌を一にしているところがある。

この点では性の先進国である米国の現状はわれわれに多くのことを教えてくれる。

米国は先進国中最も十代妊娠の頻度が高いことは良く知られている<sup>2)</sup>。しかもその半数近くが分娩しており、出生率がとびぬけて高く、社会福祉を圧迫している(表2)。これには幼ないころより独立心をもたせ、子の生き方にほとんど干渉しない個人主義的な傾向の

(表2) 米国南西部での十代分娩

State	Percent
1. Mississippi	20.9%
2. Arkansas	20.9
3. Alabama	19.1
4. Kentucky	18.9
5. West Virginia	18.5
6. Louisiana	18.4
7. Washington, D. C.	18.4
8. Georgia	18.1
9. Tennessee	18.1
10. South Carolina	18.1
11. Oklahoma	17.6
12. New Mexico	17.3
13. North Carolina	17.2
14. Texas	16.4
15. Delaware	15.9

ほかに、宗教の違い、教育の違いなどの社会構造が日本と異なることが大きい、その米国でも、性教育はここ数年大きな変換期にきている。それは不治の病と言える AIDS(後天性免疫不全症候群)患者の急増である。治療はほぼ不可能であり病気の予防でしか解決できないことを米国民が知ったからである。若年性交→AIDS→発病を断ち切るには予防しかない、それには性教育の充実が最も確実であるとの認識で、多大な財政支出を行ない、1985年ごろよりハイティーンの妊娠数の減少をみるようになってきている。その目標は、性に対する正しい知識を教え、自己の性への認識と判断力を養って、適切な意志の決定と行動の選択ができるようにすることであり、これは日本の現状に照らしても、全く同じことが言えよう。

### 学校教育での性教育

現在性教育としての教育課程は存在しない。そのことが余計に現場の教師の間でどのように性教育に取り組むかについて混乱をきたしている。歴史的にみると戦後に「純潔教育基本要項」として発足した性教育は、処女性尊重の教育として受けとめられ滲透して行った。

その後は保健体育で生理的な面を、人間関係での面で社会科や道徳の時間で教えるなどの方法に分散したため、性教育としての identity を失ってしまった。しかし現実面で性非行という現象が先行するにしたがって、一部の教師の間では、性の不安や悩みの解消、性被害の防止や問題行動のチェックなどを含みながら、なんとか人間の性を学ばせようとの努力がみられ、一部の地方教育委員会レベルでは、指導内容の体系化が図られつつあるのが現状である。

しかし統一した形での性教育は、学校では教師間の認識や意識レベルの差、世代の断裂、教員養成機関そのもので性教育を教えないなど多大な問題点をかかえており、現実には看護婦資格を有する養護教諭が、性の生徒指導にあたっている現場が少なくない。しかし養護教諭では、とくに男子生徒を含めての性教育は重荷との声も多い。

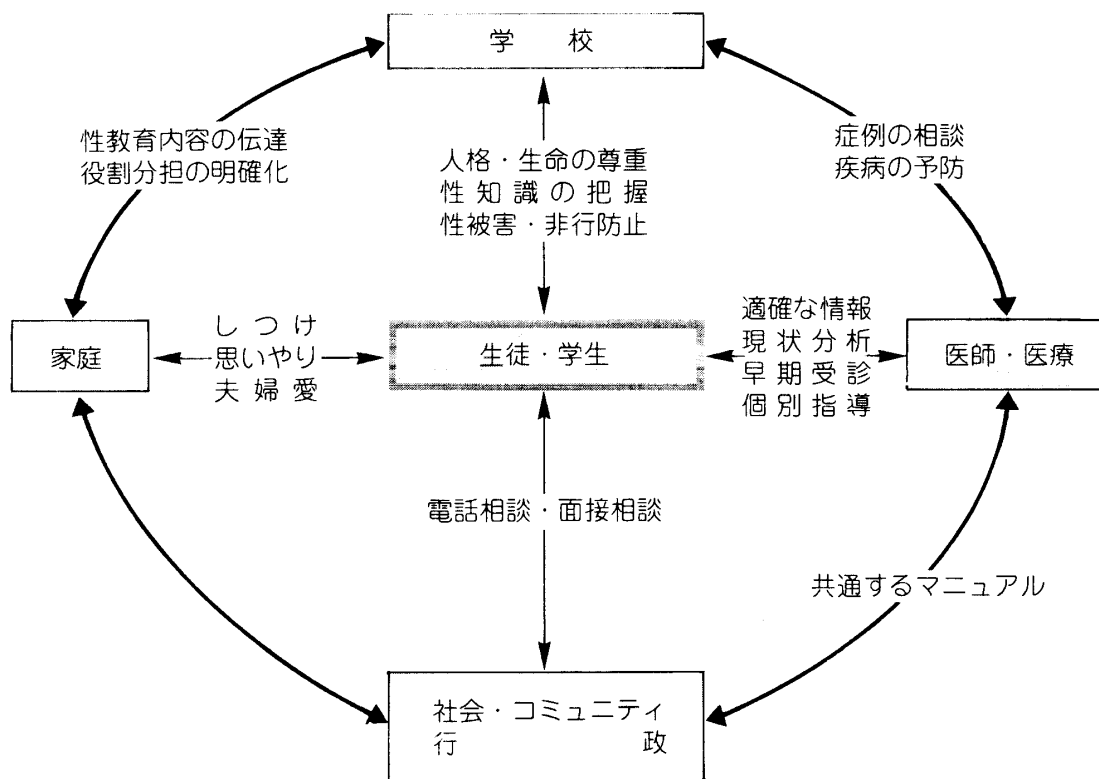
### どのように性教育の充実を計るか

このように社会的に体系化された方向にない性教育に産婦人科医がかかわるには多くの問題点がある。個々の症例とその予後を最も現実を知ることでできる立場にはあるが、教育現場に一方的に入ってゆくことはできない。

その点で表3に示したような学校や行政とリンクしたシステムの確立がぜひ必要である。生殖生理としての性 (Sex) 以外に、心理面、人格面を理解しうる性 (Sexuality) をも十分に理解しなければならない。それでは具体的にどのようなアプローチがあるだろうか。

まず現実をよく教えることである。多くの症例が「愛があれば、責任をとれば」良いと自己弁解をしてなんとなく性交し、妊娠すると多くの症例は中絶し、結果には後悔の気持ちをもち、またその後で相手とは短期間で別れてゆくという現実を、症例を通じて話しかけよう。また医学的に言っても、若年の妊娠中絶が、将来の生殖機能に少なからず影響することも、具体的な例をもって教えることである。筆者が米国滞在中 (1985~1987)、ある高校での性教育の授業を見学する機会を得たが<sup>4)</sup>、印象として感銘をうけたのは、そこで行なわれていたのはすべてのことを (性行為を含め) 視聴覚教材や、実際におこった症例を通して具体的に教え、その行動や意志決定が良かったのか悪かったのかをディスカッションを通して、自分自身にさせるという方法をとっていた。さらに高校より少し離れたところには Teen Health Center という Clinic があり、年間5ドルの会費で避妊の相談や妊娠の診断まで専任のナースと顧問のドクターが相談に乗ってくれるシステムがあり、これがよく機能していることを知った。

また妊娠した例には Teen Pregnancy Service(TPS)というシステムで、妊娠分娩に関する特別のクラス編成でケアするようになっており、決して妊娠してしまった症例を退学などの形で切り捨てることがないことは、日本でも早急に学ばなければならないであろう。



(表3)

## おわりに

全体として妊娠中絶数が年々減少しつつある中で、十代の妊娠数の増加が問題となっており、性教育の差し当たっての目標としてこの数を減少させることである。それには現代の若者の性に対する感覚を十分に理解し、さらに現状分析を適確に行なって現実にもとづいた症例をもって、十代の若者に自分自身でどのような行動をとることが最良かを教えることが最も効果的な性教育である。それには現場で多くの症例を知る産婦人科医が適任であり、行政および学校当局と協力して進めることが良い。また最近各地に拡がりつつある“思春期の電話相談”にも積極的に参加してゆきたい。

その際には性の先進国である米国の現状を知ることは、極めて有力な指標を与えてくれる。今手をうてば、まだ日本においては、米国が重大な社会問題となっている十代の性の問題に対して、効果的な結果を期待できよう。

## 《参考文献》

- 1) 日本産科婦人科学会小児・思春期問題委員会報告：わが国における思春期妊娠第3回調査報告. 日産婦誌, 42: 399, 1990.
- 2) 佐藤芳昭：米国における十代の性の現況. 思春期学, 5: 383, 1987.
- 3) 佐藤芳昭：米国における学校性教育の実際と問題点. 母性衛生, 29: 220, 1988.
- 4) 佐藤芳昭, 小林かよ子：高校生の性経験. 産婦治療, 54: 427, 1987.
- 5) 田能村祐麒：学校における性教育の現況. 産婦人科MOOK, No. 40: 259, 1988.